

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月14日現在

機関番号：53301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520224

研究課題名（和文）大正デモクラシーと朝鮮語雑誌-日韓交流の文化史-

研究課題名（英文）Taisho democracy and Korean magazines -History of cultural exchange between Japan and Korea-

研究代表者

奥田 浩司（OKUDA KOUJI）

石川工業高等専門学校・一般教育科・教授

研究者番号：90185538

研究成果の概要（和文）：大正時代の日本において、デモクラシー運動が興隆する。その一方で、デモクラシーの思想は、朝鮮の知識人及び朝鮮人留学生に受け入れられている。朝鮮の知識人及び朝鮮人留学生は、雑誌・機関誌・新聞などの諸メディアを通して、デモクラシーの思想を紹介している。本研究では、朝鮮の知識人及び朝鮮人留学生のデモクラシー思想について、朝鮮語雑誌を中心に、調査・考察を行った。

研究成果の概要（英文）：Democracy movement prospered in the Taisho era of Japan. It is also notable that the thought of democracy was accepted in Korea intellectuals and Korean students who came to study in Japan. The Korean intellectuals and students made use of the media such as magazines, bulletins, and newspapers, to introduce the thought of democracy into the general public. This research has investigated a variety of Korean magazines, and has examined the Korean intellectuals and students' thought of democracy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：大正デモクラシー、民本主義、朝鮮語雑誌

1. 研究開始当初の背景

科学研究費補助金・基盤研究（C）「1910-1930年〈日韓・韓日〉文学交流の歴史-〈移入〉という視座から-」（平成18年度～20年度）（課題番号18520154）の採択を受け、日韓の研究が共同で、1910年～1930年にかけて出版された、朝鮮語で書かれた雑誌・機関誌（以下、朝鮮語雑誌と称する）について、調査・研究を行った。その結果、以下のような課題が残された。

（1）文化政治期（1920年～1930年）には、多数の朝鮮語雑誌が発刊されている。とりわけ1920年～1925年にかけては、文化的な内容の記事が多く、興味深い。さらに考察する必要がある。

（2）1920年～1925年にかけては、大正時代の後期と重なる。大正時代後期の日本では、デモクラシー運動が盛んになっていたが、朝鮮語雑誌にも「民本主義」「改造」という言

葉が頻出している。この点について考察する必要がある。

(3) 朝鮮語雑誌では、吉野作造、柳宗悦の言説が受容されている。だが、朝鮮語雑誌における吉野や柳の受容は、日本におけるものとは位相を異にしていると考えられる。この点について考察する必要がある。

上記3点の課題が、本研究開始当初の背景となっている。

2. 研究の目的

本研究は「研究開始当初の背景」に述べた課題を解決すべく、以下の3点を研究の主たる目的とした。

(1) 朝鮮語雑誌における文化的な記事について、調査・考察を行う。

(2) 朝鮮語雑誌及び、朝鮮で発行されていた新聞を対象にして、「民本主義」という言葉が使われている記事について調査を行い、考察する。

(3) 朝鮮語雑誌に掲載された、吉野作造、柳宗悦に関連する記事について調査を行い、考察する。

3. 研究の方法

上記「研究の目的」を遂行するために、調査・考察の対象とする朝鮮語雑誌・新聞を選定した。

朝鮮語雑誌については、『現代』、『開闢』、『学之光』、『半島時論』を対象にして、調査・考察を行った。

新聞については、まず『京城日報』を調査対象とすることにした。『京城日報』は、日本語で書かれた新聞である。京城で発行されており、朝鮮総督府の意向が強く反映されていると考えられる。『京城日報』における「民本主義」と、朝鮮語雑誌・新聞の記事を比較することで、朝鮮人知識人のデモクラシー思想の特徴を明らかにできるものと考えた。

4. 研究成果

(1) 文化に関する記事について

① 洪蘭坡について

『現代』を対象にして、調査を行った。『現代』は、三・一独立運動後に、東京在住の朝鮮人留学生が中心となって発刊した、朝鮮基督教青年会の機関誌である。金根洙編著『韓国語雑誌概観並びに号別目次集』(永信アカデミー韓国学研究所、1973年)(原文ハンブル)では、『現代』を「当時の重要雑誌」の一つとして位置づけている。後述するように、『現代』の記事は思想的な傾向が強い。

『現代』は復刻版すらない状況である。本研究では、延世大学中央図書館所蔵の原本を参照した。ただし、コピー、デジタルカメラでの撮影などは許可されなかったため、筆写した。したがって、誤写の可能性は否定できないことを予めお断りしておきたい。

本研究では、『現代』第3号(1920年3月)に掲載された洪蘭坡の「煩惱の一夜」に注目した。洪蘭坡は、「鳳仙花」の作曲者として、現在の韓国でもよく知られている音楽家である。朝鮮人は、「鳳仙花」を独立への願いを込めて歌ったという。

「略歴」(遠藤喜美子『鳳仙花 評伝・洪蘭坡』文芸社、2002年)を参照すると、洪蘭坡は朝鮮で音楽を学んだ後、「1918年 上野の東京音楽学校予科に入学」「1919年 三・一独立運動で、日本警察の目を避け帰国」「1920年 2回目の渡日、すぐ帰国/4・28「鳳仙花」の原曲である「哀愁」作曲」とある。「煩惱の一夜」が書かれたのは、洪蘭坡が独立運動に関わった頃のことであることが分かる。

「煩惱の一夜」は、小説ともエッセイとも決めがたい小品である。暗い情調が漂い、主人公の置かれている状況が決して順調なものではないことが暗示されている。

本研究では、「煩惱の一夜」を抄訳して、『金沢大学国語国文』第36号(2011年3月)に掲載した。(「洪蘭坡「煩惱の一夜」について」)

なお『現代』には、他に洪蘭坡の「日光スケッチ」(第5号、1920年5月)、「音楽の起源と未発達」(第6号、1920年6月)、「悔改(小説)」(第9号、1921年2月)が掲載されている。

洪蘭坡が『現代』に記事を書いていたことは、『現代』の記事を読んでいたこと、さらには朝鮮基督教青年会との交流が推測される。だとすれば、洪蘭坡の音楽活動には、同時代の思想的な背景があることになるであろう。

洪蘭坡は、西洋音楽を学ぶために日本に留学した。しかし洪蘭坡にとって、留学は単に音楽を学ぶことだけではなく、独立運動に身を挺することを意味していた。換言すれば、洪蘭坡は、音楽の世界に閉じ籠もることをせず、政治的な領域との接点を持ち続けていたのである。この点については、さらなる調査・考察が必要である。

② 卞榮魯について

『現代』第6号には、卞榮魯の詩「私のマリア」が掲載されている。卞榮魯は、金時雨『再訳 朝鮮詩集』(岩波書店、2007年)を参照すれば、『廢墟』(京城で発刊)などの同人として活躍し、第2次世界大戦後には大学教授の職に就くなど、一貫して詩人・文化人の道を歩んでいる。なお『廢墟』は、三・一

独立運動後に創刊された文芸同人誌である。

(2) 新聞・朝鮮語雑誌の「民本主義」について

①新聞について

『京城日報』に関する調査から報告する。「俗論を排す(二) 謬想の一=民本主義の勝利」(1919年1月10日)では、「今回の戦争」について「我邦に於いて浅墓にも軍国主義対民本主義の勝利として狂喜するものあるに至りては(略) 不見識」であると述べる。そして、「勝敗は畢竟ミリタリズムの勝敗のみ、デモクラシーは与る所なし」とする。つまり、軍国主義国家間の争いであったとするのである。

「俗論を排す(八) 所謂思想鼓吹(上)」(1919年1月17日)では、「民本主義とはいふまでもなくデモクラシーの訳語にして、明治年間には之れを民主主義と唱へたりき。(略) 方今我邦に於て之れを民本主義と呼ぶは、民主主義といふことの到底国体と相容れざるを恐れ、且つ共和政治を唱ふるものなりとの嫌疑を避けんがために、在来有合せの熟語を併用したるに過ぎず」「何ぞ初より正々堂々として「我は民主主義を主張す」といふの男らしきに如かんや」と述べている。

このような記事を掲載している以上、『京城日報』は「民本主義」に批判的な立場にあると言ってよいし、総督府の見解も同様であると考えてよいであろう。その理由は、「民本主義」と「民主主義」とは同じであり、「国体と相容れざる」という点にある。

これに対して『朝鮮日報』(1920年7月27日)の記事「日本人は民本主義の瞽盲」では、アメリカ人の言葉を引きつつ「日本は警官政治であるから日本人は民本主義の支配を受けることなく、巡查に支配される」「日本人はデモクラシーの真意を知らない」と述べている。『京城日報』とは対照的に、『朝鮮日報』における「民本主義」の扱いは肯定的である。

ここで留意しておきたいのは、『京城日報』も『朝鮮日報』も、共に「民本主義」と「民主主義」を同じものと考えている点である。

②朝鮮語雑誌について

1920年前後の朝鮮語雑誌では、「民本主義」はどのように紹介されていたのであろうか。この点について『開闢』を参照して考えてみたい。

三・一独立運動後に発刊された『開闢』創刊号(1920年6月)には、「「デモクラシー」の略義」(玄波)が掲載されている。『開闢』については、前掲『韓国語雑誌概観並びに号別目次集』において、「新文化史上、最も権威ある代表的総合雑誌」とある。その雑誌の創刊号に「デモクラシー」に関する記事が掲載されたことは、「デモクラシー」について、

朝鮮人知識人が強い関心を寄せていたことを示唆している。

この記事では「民本主義」と「民主主義」は区別されている。詳述は省くが、注意を引くのは、「民本主義」について、「民本」を東洋思想に求め、例えば「堯舜」を例としてあげていることである。その上で、「民本主義」は「国体」と矛盾するものではないと述べている。このような「民本」の概念は、吉野作造の「民本主義」を想起させる。

先に見たように、『朝鮮日報』では「民本主義」を「民主主義」と重ね合わせ、日本の政治を批判していた。それに対して、『開闢』では、むしろ客観的に説明しているように見える。

注意を要するのは、検閲の問題ではないであろうか。先に見たように、朝鮮総督府は「民本主義」に批判的であったと考えられる。推測に過ぎないが、客観的な説明をすることで、検閲をすり抜けようとしたと考えることができる。

その他、『学之光』(1920年7月)に「デモクラシーの意義」(高永煥)、『半島時論』(1919年2月)に「民主主義と民本主義の差別」(一笑生)がある。

ただし『半島時論』については、朝鮮語で書かれてはいるものの、前掲『韓国語雑誌概観並びに号別目次集』では、日本資本による雑誌であり、「日帝の先導者的性格」を備えていたとする。留意すべき点である。

以上、見てきたように、1920年前後の朝鮮語で書かれた新聞・朝鮮語雑誌には、「デモクラシー」に関連する記事が散見される。この事から、三・一独立運動後の朝鮮人知識人にとって、デモクラシーは示唆的な思想であったことが分かる。

本研究では、主として資料調査に時間が割かれた。今後、内容についてさらに考察を加え、日本と朝鮮の間におけるデモクラシー思想の差異性について明らかにする必要があると考える。

③卞熙瑢「新人の声」について

やや補足的なものになるが、朝鮮人留学生が、朝鮮語雑誌や新聞に対してどのような期待を抱いていたのかという点について、調査を行った。『現代』第5号(1920年5月)に掲載された卞熙瑢の「新人の声」では、「今年3月以後に2、3種類の新聞雑誌が出るそうです。其中で、東亜日報は信憑しますが、ほかのものには疑問があります」とある。『東亜日報』に期待を抱いていることが分かる。さらに卞熙瑢は、「私たちが努力すべきことは、既存する雑誌の内容を充実に、豊富にし、また新しくすることと、まだ無い言論の発表機関をたくさん作ることです」と述べている。朝鮮人留学生にとって、朝鮮語による雑誌・

新聞の発刊は、啓蒙の場として貴重なものであったことが、この記事からうかがわれる。

なお、卞熙瑢の「新人の声」を抄訳して『金沢大学国語国文』第35号（2010年3月）に掲載した。（「研究ノート 卞熙瑢について」）

（3）朝鮮語雑誌に掲載された、吉野作造、柳宗悦に関連する記事について

①吉野作造について

『現代』1号（1920年1月）の巻頭に掲載された金俊淵の「現代の使命」について考察した。

先に『現代』について若干の説明を行ったが、さらに補足しておきたい。『現代』については、小野容照の「在日朝鮮人留学生卞熙瑢の軌跡—在日朝鮮人社会主義運動史研究のための一視座—」（『二十世紀研究』第10号、2009年12月）が参考になる。小野は三一独立運動後には、「朝鮮内では独立運動の理論的摸索期に入り、知識人による新しい理論や思想の積極的な啓蒙活動が展開された」が、「日本の朝鮮人社会」においても同様であったとし、「その担い手」は「社会運動への自覚の芽生えた在日本東京朝鮮基督青年会（以下、朝鮮 YMCA）の主要メンバーたち」であったと述べる。

この小野の指摘は正鵠を射ていると思われる。『現代』を発刊したのは朝鮮基督青年会であり、『現代』は独立運動における知的探求の場なのであった。

さらに小野の指摘を引けば、『現代』という誌名には、「朝鮮 YMCA のメンバーたちが、自分たちが生きている「現代」という時代を深く理解し、（略）今後進むべき方向を見定める必要があると考えたからであった」とある。

だとすれば、『現代』1号の言わば巻頭記事として掲げられた金俊淵の「現代の使命」は、朝鮮基督青年会の中心的な思想を表していると考えてよいのではないだろうか。

「現代の使命」では、次のようなことが述べられている。

軍国主義は、世界の流行児になってしまった。したがって、国家の最高目的は、軍備の拡張にあると言える。それ故、内治上、自由だの平等だのと言っているが、外国に対して弱肉強食という獣性的衝動を、遠慮無く発揮するようになった。学者はこの国家の行動を弁護するために、様々な学説を案出して哲学的組織までも完成させた。国家の力による支配を弁護するのに、第一に必要な学説は、国家至上主義説である。（略）したがって、正直なマキアベリスタは、国家の目的のためには、道徳を無視しても関係ないと、高唱力説した。日本のある学者の中でも、国家のためなら、人を殺すこともかまわないし、他の人

の財物を略奪することも道徳であると極説した。

部分的な引用なので、やや分かり難いかもしれないが、この記事で金俊淵が批判しているのは「国家至上主義」である。

ところで同年同月（1920年1月）の『中央公論』には、吉野作造の「政治学の革新」が掲載されている。この記事で、吉野は次のように述べている。

正直なマキアベリは思ひ切つて、国家の目的の爲めには道徳を無視すべきことを高調力説して、臆病な世間を驚かしたけれども、古い政治学は結局茲に落付かなければならぬ筈のものである。最近の伶俐な政治学者は全然倫理道徳を無視していゝとはいひ切れ得なかつたと見えて、遂に国家の爲めに尽すことが最後の善なりと云ふ一種独特の倫理説を立つるに至つた。故加藤弘之先生の如きは真に国家の爲めならば人を殺すも可、人の財物を奪ふも亦道徳なりと云ふ風に極論されたこと記憶するが、そこまでに至らなくとも所謂国家の爲めにしてこと夫れ自身の上に絶対の倫理的価値を認めんとするの誤謬を抱くものが多かつた。

一読して明らかのように、金俊淵と吉野の記事内容は重なっている。

その理由の一つとして考えられるのは、金俊淵と吉野の交流であろう。松尾尊賢「吉野作造と在日朝鮮人学生」（『民本主義と帝国主義』みすず書房、1998年）によると、金俊淵は東大学法学部政治学科に在籍するなど、吉野とは近い存在であった。したがって、金俊淵の記事が吉野の学説と近接したと考えられる。

しかし、だからと言って、金俊淵の国家主義批判が、吉野の政治思想の影響下にあると考えることは早計に過ぎるように思われる。なぜなら、『現代』の基本的な論調は植民地主義批判にあり、金俊淵の記事も植民地主義批判を眼目としているからである。

もっとも、よく知られているように、吉野は日本の朝鮮統治を批判した。その点では、金俊淵と同様である。しかし、その先に吉野が構想していたのは、「国家」を超越した新たな「道徳」の下に「日鮮」が「融合」することであった。

だが、はたして金俊淵は、そのような吉野の構想に同意し得たであろうか。換言すれば、吉野の唱える「道徳」を共有することが、植民地朝鮮を解放することになると思ひ得たのであろうか。この点については、今後、考察を深めていきたい。

なお、上記の問題については、若干の考察を試み、『現代』の研究（補遺）」と題して、

『金沢大学国語国文』第 37 号(2012 年 3 月)に掲載した。

②柳宗悦について

『現代』9号(1921年2月)には、関泰瑛の「朝鮮民族美術館の設立と柳氏」が掲載されている。この記事では、柳宗悦の「朝鮮の友に贈る書」の一節が引かれているが、柳宗悦の本来の趣旨とはやや異なった引用のように思われる。この点については、今後の課題である。

なお、柳宗悦に関して、研究分担者である梶谷崇が「白樺美術館から朝鮮民族美術館まで」(『시라카바미술관에서 조선미술관으로』)という論文を『柳宗悦と韓国』(『야나기 무네요시와 한국』)(소명出版、2012年)に掲載している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 奥田浩司、『現代』の研究(補遺)、『金沢大学国語国文』、査読有、第37号、2012、pp.115-124
- ② 奥田浩司、洪蘭坡「煩惱の一夜」について、『金沢大学国語国文』、査読有、第36号、2011、pp.73-83、
- ③ 奥田浩司、『文化生活』と吉野作造-朝鮮に関する評論をめぐって-、『有島武郎研究』、査読有、第13号、2010、pp.42-54、
- ④ 奥田浩司、研究ノート 卞熙瑢について、『金沢大学国語国文』、査読有、第35号、2010、pp.48-56、

〔学会発表〕(計3件)

- ① 奥田浩司、柳宗悦の受容をめぐって-朝鮮語雑誌『現代』の柳宗悦-、文化史研究会 2012 年度例会、2013.3.16、石川四高記念文化交流館
- ② 奥田浩司、大正デモクラシーと朝鮮人留学生、文化史研究会 2011 年度例会、2012.3.17、石川四高記念文化交流館
- ③ 奥田浩司、『文化生活』と吉野作造-「民本主義」をめぐる応答-、有島武郎研究会第45回全国大会、2009.6.6、北海道大学

〔図書〕(計1件)

- ① 梶谷崇、加藤利枝、他7名、소명出版、『야나기 무네요시와 한국』、2012、PP.56-90

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
無

6. 研究組織

(1)研究代表者

奥田 浩司 (OKUDA KOUJI)
石川工業高等専門学校・一般教育科・教授
研究者番号：90185538

(2)研究分担者

梶谷 崇 (KAJIYA TAKASHI)
北海道工業大学・未来デザイン学部・准教授
研究者番号：10405657